

2 野 菜

項 目	作 業 内 容
<p>(1) 果菜類の 管理</p>	<p>(今月の作業のポイント)</p> <ul style="list-style-type: none"> ○果菜類の管理 ○いちごの育苗管理 ○台風・豪雨対策 <p>ア 高温対策</p> <p>夏場の雨よけハウスでは、ハウス内の温度が40℃を超えることがあり、株の消耗や花質劣化による着果不良が発生する場合がある。そこで、ハウスの側面や妻面などをできるだけ大きく開放し、換気を良くするとともに、古葉や混み合った葉は適宜除去し、通風の確保に努める。</p> <p>きゅうり、なす、ピーマンなどの露地果菜類では、株元に稲ワラや刈草を厚く敷き、地温上昇や土壌乾燥を抑制し、根を保護する。</p> <p>イ かん水・追肥・摘果</p> <p>この時期のかん水は日中を避け、気温の低い朝夕に行う。追肥は、草勢を見ながら、チッ素成分で2～3kg/10 aを7～10日間隔で施用する。粒状肥料は、土壌が乾燥していると肥効が現れにくいため、施用後に適宜かん水する。</p> <p>着果負担、高温、乾燥等により草勢が低下した場合、果実の若どりや奇形果（きゅうりでは極端な曲がり果や先細り果、尻太り果など）を中心に摘果し、草勢回復に努める。</p> <p>ウ 摘葉（葉かぎ）</p> <p>トマトやきゅうりでは、不要になった下位葉や、発病葉、過繁茂の部分などを適宜除去する。なお、傷口からの病原菌の侵入を防ぐため、葉かぎは晴天日の午前中に行い、夕方までに傷口が乾燥するよう促す。</p> <p>エ 病虫害</p> <p>晴天が続くとハダニ類、アブラムシ類、アザミウマ類等の発生が多くなるため早期防除に努める。また、8～9月にかけては、果実を加害するオオタバコガやハスモンヨトウのほか、ハモグリバエ類などの発生が多くなるため、ほ場をよく観察して防除を徹底する。</p>

項 目	作 業 内 容
<p>(2) いちごの育苗管理</p>	<p>オ 生理障害 土壌の乾燥が続いたりチッ素施用量が多すぎたりすると、カルシウムの吸収が妨げられ、トマトやピーマン等では尻腐れ果が発生しやすくなる。</p> <p>このため、かん水管理に留意するとともに、カルシウム剤の葉面散布を定期的に行う。</p> <p>育苗中期～後期は、施肥やかん水・葉かぎなど、基本管理の徹底により苗の充実を図る。育苗後半は、チッ素肥料を切って植物体内のチッ素濃度を低下させ、花芽分化を誘導する。また、炭疽病を中心とした病虫害防除に努め、健苗を養成する。</p> <p>ア かん水 天候と培養土の乾き具合をみて、苗が萎れないよう1日に数回かん水する。自動かん水管理でも注意を怠らず、様子を見に行く。</p> <p>イ チッ素肥料の中断 いちごは低温・短日条件で花芽分化し、苗の体内チッ素濃度を低下させることで、花芽分化を促進することができる。</p> <p>チッ素肥料を切る時期は作型によって異なる。無冷促成のポット育苗では8月中～下旬頃が目安となるが、ポットの大きさや育苗方法、品種等によっても異なるため、これらの条件に合わせて時期をずらす。</p> <p>なお「紅ほっぺ」は、育苗終盤に極端に肥料切れすると、本ぽで芯止まり株が発生することが懸念される。そのため、適切な肥培管理を心がける。</p>



写真1 トマトの尻腐れ果

項 目	作 業 内 容
<p>(4) 台風・豪雨対策</p>	<p>ウ 小型ポットの根詰まり対策 小型ポット育苗では、育苗後半になると、ポット内に根が充満して排水不良となり、根腐れや褐変が見られることがある。この場合、ポットから苗を一度引き抜き、挿し直すことで排水が改善される。</p> <p>エ 病虫害防除 炭疽病、ハダニ類などは、定植までに防除を徹底し、本ぽに持ち込まないように努める。</p> <p>写真2 ポット底面の根詰まり</p> <p>台風襲来やそれに伴う豪雨に備えて、この時期は特に草勢維持に努める。また、事前対策として施設の補強、防風網の設置、排水溝の整備を行い、茎葉をしっかりと誘引する。事後対策としては、ほ場内の排水をすみやかに行う。豪雨被害を受けたほ場は、損傷した茎葉の除去や摘果、疫病・炭疽病・軟腐病等を対象にした薬剤散布、液肥や尿素の葉面散布を行い、草勢回復を図る。なお、強風や豪雨時のほ場見回り事故を起こさないよう、危険回避に十分留意する。</p>



写真2 ポット底面の根詰まり

(作成 農林水産研究所)